

書評

第105号

1994. 10

書評編集委員会





寄稿

パリソンとは何か——その唱法に探るソリの真髓——…… 谷口ふみ奈 4

連載

在日韓国・朝鮮人子女の教育問題ノート 20
北朝鮮系・在日教職員団の教育観 …… 梁 永 厚 14

研究余滴 象徴主義 14 第3章 象徴主義運動
Ⅲ 運動の中の詩人たち …… 山村 嘉己 24

6、エミール・ベルハールレン(一八五五—一九一六)と、ベルギーの詩人たち
おいてけぼり——宮本輝試論 IX—— …… 芝田 啓治 34

日本中国ことばの来往 ゆきき その50 …… 芝田 稔 42

羅針盤 …… 2

編集後記 …… 48

題字 ■ 網干善教(文学部教員)



童話の中の女の子が弱く、無邪気で美しいことは誰もが知っていることだ。私とは違う少女たちが、この上なく美しいがゆえに、眠っているだけで白い馬に乗った王子様が困難から助け出してくれることを幼い頃、羨ましく思った。

例えば、白雪姫は継母が自分の命を狙っているとも気付かず、ただ成り行きに身をまかせているだけなのである。また、小人の家にいる白雪姫を追って来た継母に3度も殺されてしまう。3度とも小人たちに「いじわるな継母がやって来るかもしれないから気を付けるんだよ」と注意されているにもかかわらず、継母の口車に乗せられて殺されてしまうのだ。3度も同じように騙されるとは、白雪姫がよく考えた上での行為とは思えない。更に毒リンゴを食べて倒れた後で王子様が偶然通りかかって抱き起こすまで横たわっているだけで、自分からは一切の働きかけをすること無しに幸福を手に入れるのである。それに対して、継母は魔女は行動派である。白雪姫を殺すため3度も小人達の家を訪れ、1回目は腰のリボンをきつく締めることで、2回目は毒を塗った櫛で、3回目は毒リンゴでと段々と手のこんだ、より確かな方法へと変えている。

この継母は美しく、ナルシストである。だからこそ毎

毎日鏡を覗き込んで映し出された自分の姿を見て安心する。「世の中で一番美しい」ということは彼女が生きてゆくための自信なのである。それが白雪姫に奪われたとわかった時、烈火のように怒り、どうすれば世の中で一番の美しさを取り返すことができるのかとそれだけを考え、その目標のみに向かつて突き進むのである。

この継母は、プライドが高い上それに負けない強さを持っている。自分自身の中で自分を位置づけることができるからこそ、自分をより確かな所へ導びこうとするのである。

ここまでで、白雪姫の継母＝魔女というのは、現在の女性のあるべき姿に非常に近いと思われる。

童話の中では19世紀のヨーロッパの常識が反映されている。そこで理想の女性とは、美しく従順な誰からも愛される女の子であり、無邪気で自分からの働きかけは全く無しに寝て待つことが唯一の幸福になる手段であると考えられていたのである。

現在にこの19世紀の理想は必要でないと考える。

最近の女子大生の就職難は新聞紙上でも大きく取り挙げられ深刻な問題となっている。自立しようと思つて張り切る女子大生を企業は最初から受け入れようとしないのだ。企業側が女子の雇用を嫌うのは、不況のせいばかり

りではなく、それなりの理由がある。

女性を仕事場から排除し、家庭に閉じこめてしまうことは、社会が要求する女性の位置づけの問題である。次世代の労働水準を維持するためには、労働人口を安定させなければならぬ。そこで子供を産み育てる存在としての位置づけを女性に押しつけたのである。

このことは「女性らしさ」を左右してしまった。白雪姫のような女性こそが理想とされ、魔女のような女性は排除の対象となつたのである。「女性らしさ」は、本来の女性が持っている特性などではなく、社会が必要に応じて作り上げたものである。

仕事場の白雪姫たちは、今日もお茶くみ、コピーとり、電話番号だけに押しこめられている。

女性が、白雪姫のまま就職を考えていることは、女性の位置づけを変えることには決してつながらぬ。就職をまじめに考えることは、今ある女性の位置づけを冷静に理解し、不平等な待遇を押しつけられていることに気付くことと、その上で、自分の考えで実際に行動し、自分のすべてに責任をもてることである。

女性は、女性らしくあるのではなく、女性も人間らしくありたいと思う。童話の中の魔女こそが、今求められている人間らしい女性なのである。

寄

稿

パンソリとは何か

——その唱法に探るソリの真髄——

谷 口 ふみ奈

韓国映画『西便制』(邦題『風の丘を越えて』)は、
本国での大ヒットに続き、日本でも好評だったようだ。

韓国ではこの映画のヒットにより、パンソリ(唱劇、劇歌)がブームになったと聞く。今年が『国楽の年』と銘打たれたこともあり、各地でパンソリ鑑賞会が盛んに行われているそうだ。それまでのパンソリのイメージと言え、本国の韓国でも、日本統治時代に始まった長年に渡る社会不安の余波のため、かつては大衆芸能の花形であったという事実がうそのように、「あれは老人のもの」という意識が一般的になるほどにまで衰退していた。ところが民主化の時代に入ったのを契機に、自国のものを

見直そう、という動きが起こっていた中で、映画は正にグッドタイミングで現れて大成功を収めたのである。

そのパンソリとは、いかなるものなのか。現在入手可能な日本語のパンソリに関する書籍は二冊あり、その他にはこの映画の日本版パンフレット等で、パンソリの概論と代表四作品の内容(現在最もよく唱われるパンソリの代表的な五作品である『タソンマダン』のうちの四つ)を知ることができる。そこでここでは概論についての説明は省くことにし、焦点をパンソリの唱法に絞って、概論よりはやや詳しく触れることにする。

韓国でも、パンソリは難しくて常人から逸した芸能、

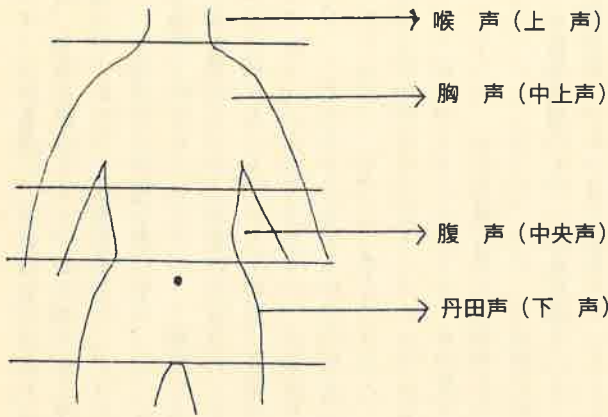
というイメージが色濃い。それはあの大地から沸き起るような、独特な声のイメージから何となく持たれている先入観なのであろう。草野妙子著の『アリランの歌』によると、全羅道の子供達の歌う歌は、どことなくパンスリ的な発声で歌われていたという。韓国でも解放後は、学校での音楽教育は日本と同様の西洋方式で行われているが、本当に肌になじんでいるものは、家庭で親や祖父母達の世代から伝えられてきたもの、その国やその土地に生まれ育った者のみが持ち帰る固有の伝統に基づくものだったのであろう。そうして考えてみると、全羅道地域の土俗的な歌の要素をかなりとりいれているパンスリは、かつての世代の人々にとつては、その風土の中で特に学ぶこともなく、ある程度自然に自分のものにすることができたのかもしれない。そのことは庶民の歌である民謡も、全羅道地域のもの（南道民謡という）は、パンスリとの区別がつかないほど似通っていることから推察される。南道民謡の伝統的な唱法のことを

『^{キョウソク}唱』といい、韓国でも一般的にはパンスリの唱法のことでも『唱』と言われているのは、その現れなのであろう。

だが実際は、南道民謡の『唱』とパンスリの『唱』とを、同じものと考えることはできない。民謡の『唱』と

比べて、パンスリの『唱』は、より後天的、人工的な声で歌われる。映画のクライマックスに、主人公の松花^{ソンガ}が山中にこもつてソリ練習をするシーンがある。パンスリの唱者達は昔から、パンスリの声（これをソリという）を自分に作り上げるために、必ず独工^{ドコウ}と称する一人練習の時期を経るのが常であった。山中の滝壺などに向かつてひたすら声を出し、その声が滝の音に打ち勝つまで修行を続けるのである（もつとも滝壺に向かって声を出す、という練習法はパンスリの一般的なイメージの一つに過ぎず、真つ暗な納屋にこもりつきりで独工をするようなケースもあった）。そうした末に、自分の力でソリを作り出すのである。口承芸能であるパンスリを習得するには、まずは自分がついた師匠の発する通りの声、音律、歌詞を、そっくり会得しなければならぬ。その発声の基本は丹田呼吸（臍の下の辺りで行われる腹式呼吸）に始まる。その呼吸によって発声が行われ、その音の高低により別図のように声が出し分けられる、だがあくまでもこの分類は、声が出てくる場所を区分しただけのものであり、技巧的な声の種類は、名前がつけられているものだけに限っても五十以上にも及ぶ。パンスリの『ソリ』を、『ノレ』（韓国語の『歌』という意味）という言葉を使わずに『ソリ』（『音』という意味）という言葉で表す

のには理由があるのであって、正に「ソリ」は、森羅万象の音を、一人の人間の声だけで表さなければならぬため、それだけの声の種類があつて当然なのである。そしてパンソリの唱者である以上、それらの声が出せることがまず要求されるわけで、そこに至るだけでも相当の修行が必要となる。



それとは別に分類されている音色の区分があり、それが以下に挙げる三大基本調である（なお、パリソリの名著『朝鮮唱劇史』鄭魯混著のように、これを以下の二つのみの二種類に分類する意見もある）。

一 羽調ウヅ

丹田で力をこめて声帯を大きく広げ、ほとばしるように出すソリ。そのため堂々とした重厚さを表現することができる。男性的なソリと形容されることが多い。

二 界面調ケミンソチ

男性的な羽調の対極を成す女性的なソリ。柔らかく美しい声であり、パンソリの繊細な部分を表現する時、すなわち哀切感、嗚咽、観念的な部分などを表現するのに適している。

三 平調ヒンソチ

一と二の中間に位置するソリ。わかり易く言えば、一と二が聞かせどころに使われるとすれば、平調はそれ以外の部分で使われるソリである。全体の中では目立たないが、パンソリの主調を成すソリであるため、確実に全体の調和がうまくとれなければならない。

これらのソリを駆使できるようになって初めて、その唱者は文字通り『得音トクオン』を得たと評価されるのである。

しかし得音を得たからと言って、すなわちそこでパン

ソリの名唱になれるとは決して言えない。師匠から教えられた声、音律、歌詞をそのまま自分のものにしても、それはただの猿まねであり、それ以上のものにはなり得ないのである。それをよく示す近代五名唱の一人であった宗萬甲（一九六五―一九三九）にまつわる、次のようなエピソードがある。ある時、パンソリの名人であるという一人の若者が宗萬甲に紹介された。若者は『興甫歌』（タンソンマダンの一つ）の中の『パク打令』という場面を大変立派に唱って居合せた人々を感嘆させたが、宗萬甲だけは首を振ってこう呟いたというのだ。「それのどこがおまえのソリというのだ？ 私のレコードのソリに過ぎないじゃないか」と。その若者は宗萬甲のレコードをそっくりそのまま模倣したのにとどまり、独自の個性を育てるまでには至らなかつたのだ。彼が名唱になれなかつたのは言うまでもない。宗萬甲本人は、パンソリの名家宗家の出身であつたが、その唱法が宗家の伝統を覆したとされ、勘当されたほどの異端児であつた。また、宗萬甲にやや遅れて世に出た名唱林芳蔚（一九〇五―一九六一）は、多くの人々の評価を受けながらも、ずば抜けた自己消化の才能ゆえに、『パンソリの逆賊』と呼ばれることもあつたという。つまり、名唱の条件とは、伝統を受け継ぎながらも、そこに何か自分なりの個性と独





創性を生み出すバイタリテイがあることだったのである。パンソリが口承芸能であるゆえんである。

ここで映画の題名にもなっていた西便制と、それに比較される東便制トビシシについて、触れることにする。

―制というのは、パンソリの流派を意味する。それには、以上の二つの他に江山制カサザシという流派もあり、大きく分けて三つの流派が伝えられている。簡単に言えば、西便制は、名唱朴裕全ユクセンによって始められたもので、主に全羅道西部出身の名唱によって伝えられ、東便制は、宗家の創始者宗興祿ソンフンによって始められたもので、全羅道

東部出身の名唱によって伝えられ、江山制カサザシは、晩年の朴裕全によって始められたもので、西便制と東便制の融合体である。それぞれの特徴を一言で言うならば、西便制は界面調を主唱し哀切性に富んでいるのに対し、東便制は羽調を主唱し重厚さに富んでいる。現在ではその違いは明確ではなくなってきたが、それも個性と獨創性を重んじるパンソリに於いては、各流派の「らしさ」を継承することが絶対事項ではなかったことの現れであろう。先に触れた宗萬甲勸当の理由も、東便制の名家であった宗家の出でありながら、自らの唱法の中に西便制の特徴を取り入れたことであつたとされている。

ところでそのような宗萬甲の唱法は、パンソリを通俗化させたと当時は批判されたのだが、正にそうした言われ方に、西便制と東便制の違いを端的に見ることができるようにも思われる。

界面調を主唱し繊細さに富む西便制は、その繊細さを表現するために、技巧的な声をより駆使した。それゆえに羽調を主唱し重厚さに富む東便制は、西便制に比べて先天的な声をより重視し、過度に技巧を求めることがなかったため、人の感情に訴える鑑賞的な面白味にはやや欠ける感は否めなかった。宗萬甲には恐らくそれが不満で、自家の伝統であつた東便制にやや西便制の味を加え

ただが、それが宗家の伝統から見れば通俗化への墮落と映った。なぜそれが通俗化と言われたのであろうか。西便制も一つの伝統であることには違いないはずである。その答えは、西便制のソリが、より人の感情に直接的に、しかも技巧的な声で、訴えるものであったから、というところにあるだろう。そして当時、そのようなソリが、直接的な面白味に欠ける東側制のソリに比べ、人々の要求にかなうものになりつつあったのである。『天下の大名唱 林芳蔚』の著者千二斗チニド氏は、その理由について、当時中国の京劇や日本の歌舞伎などの影響を受けて盛んになっていた唱劇の影響も大きかったと見ている。一人で森羅万象のソリを表現する伝統的なパンソリとは対照的な唱劇は、世界のどこにでも見られるありきたりの演劇形態であり、それゆえ万人から受け入れられ易く、パンソリの大衆化にも一役買ったのである。そのソリは恐らくどちらかと言えば、鑑賞的な西便制よりのものであつたらう。

パンソリの通俗化について、もう一つ想起される話は、昔から唱著の間に言われてきた、一つの鉄則である。その鉄則とは、パンソリの唱者、すなわち『廣大』クワダは、代表的な南道民謡である、『ユクチャベギ』と『ブン打令』ブンダリョウを唱うことが禁じられてきた、というものである。これ



はパンソリの成り立ちについて考えてみれば、非常に逆説的な矛盾の鉄則であると言える。なぜなら、パンソリの旋律は、南道民謡のエッセンスをかなり多く取り入れて成立したものであり、その代表である『ユクチャペギ』や『フン打令』などは、むしろパンソリがそれらの直接の影響を受けて成立した、とまで言われているのであって、実際聞いてみても、パンソリを知らない者もとっては、パンソリのある部分とこの二つの南道民謡との区別がまるでつかないほどだからである。

その矛盾を解く理由を、先に触れた千二斗氏はこう推測している。『ユクチャペギ』『フン打令』は界面調を基調としたソリゆえ、哀切性に富む余りに、殊に男性唱者が唱う場合にはふさわしくなかったであろう、と。現在ではパンソリ唱者がこの二つを唱ったとして鉄則に触れるという話は聞かないが、それも現在は女流名唱の数が多くなったことと無関係ではあるまい。

パンソリの唱者の避けるべき声の中に、『ノランモク』というものがある。直訳すれば『黄色い声』ということになるが、別に表すとすれば『パンソリもどきの声』であろうか。また、鼻に抜ける声、バイブレーションなども、避けるべき声であるとされていた。これらについては、日本の演歌の声を思い浮かべてみれば理解し易い。

こぶしや痺れ声などを駆使し、その技巧で聞かせ、人の感情を直接的に支配する、あの声である。実際、私も短期間パンソリを習ったことがあるが、そのような声は比較的習得し易く、また他人の耳には上手に聞こえ易い声であることに気が付いた。『ノランモク』はそれゆえに、唱者が陥り易い、しかし決してそれに溺れてはならない声なのである。だが、唱劇の流行と日本の植民地支配、そして日本文化の流行は、ほぼ時を同じくして行われていた。唱劇発展に尽くした丁^{チョンソリル}貞烈（一八七六一—一九三八）の理想は純粹なものであったにしても、時代の流れとして、唱劇もその流行と無関係でいられたはずはなかっただろう。

そのような、技巧的なこぶしや痺れ声は習得し易い上に、他人の称賛を集め易いものであるのだが、演歌もそうであるように、ただそれだけでは、優れた芸能には到底なり得ないの言うまでもない。殊にパンソリは一つの物語、いわば一つの人生や世界を一人の人間の声だけで表現するものである。それをなし得るには、当然唱者自身が独特の、そして切実な人生観を持つていなければならぬ。それをソリで表現できるだけの技巧というものも当然重要だが、まずは内実あつてこそその技巧である。それがあつてこそ、うそではない、本物の人生を表現す

る（パンソリ用語で言う、『裏面を描く』）ことができるのである。

そこで次に、『シギムセ』と『クヌル』の話に移りたい。『シギムセ』とはパンソリ用語の一つで、先に挙げた『得音』の次に会得すべき技術的なものを指す。パンソリとは水のようなもので、河の水がゆっくりと流れたり急流を作ったり渦を巻いたり澱んだり、あらゆる形をとりながらもとうとうと流れ続けるように、ソリも流れなければならぬという。しかも唱者がその流れを作り出すのではなく、流れが自然にゆくにまかせて、唱者のソリはその流れに乗らなければならない、というのだ。『シギムセ』とは、そのような境地に至らしめる唱者の力量のことをいうのである。そこに至って生まれる『モッ』、すなわち味わいのことを、『クヌル』という。果してそのような境地に至るのに、小手先の技巧だけで可能なものであるうか。私事になるが、私は先に触れた丁貞烈のソリには、何か心ゆさぶられるものを特に感じる。丁貞烈はソリを始めた当初は声量の不足に悩み、努力してもさほどの進展もみられずに自殺を図ったことも一度や二度ではなかった。だが彼もまた、パンソリの魔力に魅せられ、その力に抗うことができずに三十年の間練習に励み、ついに名唱になった。それゆえに彼のソリには、

何か切実に響く真実の力がこめられているような感じが生じなければならない。人生の様々な曲折を経て塗り重ねられた層の厚みのようなものが感じられるのだ。唱劇の演出に關しても、裏面を描くことに優れていたというから、ただ小手先の見てくれだけに気を配ったのではないことがよくわかる。パンソリの求める境地とは、正に人の人生の求める境地にも当てはまる。紆余曲折を経て、そこに見いだせるある境地、しかし死ぬまで決して止まることのない果てしないもの、正しく河の流れに例えられるものである。

映画『西便制』中、松花の父親が娘に諭す次のようなセリフがある。「『恨』に止まるソリではなく、『恨』を





越えるソリをしる」と。「恨」は、日本語の恨むという意味ではない。韓国人でもはつきりとした言葉に表しにくい、ましてや私などには到底表すことのできない用語だが、強いて説明しなければならぬとすれば、次のようになろうか。韓国の長い苦難の歴史の中で民族の中に培われ積み重ねられてきた苦しみで耐える感情、人の一生の中で決して逃れられず、克服することもできないが、乗り越えようとする感情を持ち続けなければならぬもの。パンソリと「恨」とは、切っても切れない関係にあると言っても過言ではない。パンソリは「恨」の芸能であると形容されるほどである。人の一生は河の流れのようなもので、ソリもまたしかりである。その流れは正に『恨』の流れである。それゆえ、唱者やさらには聴者の人生とびったりよりそうように、どの一点に於いても止まることなく流れてゆくものである。もはや老人のものが、ただ衰退してゆくばかりのもの、と言いつ捨てて人々も多いが、私はパンソリを愛する者の一人として、時の流れに適応しながら、パンソリが今後も唱われ聞かれ続けるであろうことを信じていたい。

(たにくち ふみな)

『書評』編集 STAFF募集!!



注 ※1 다섯마당

※2 창

※3 육자배기

※4 흥타령

※5 노랑목

※6 이면을 그리다

※7 시김새

※8 그늘

※9 덧

参考文献

『パンソリ』 姜漢永他 平凡社 東洋文庫

季刊『三千里』 三十号

『アリランの歌』 草野妙子 白水社

以下韓国語文献

『天下の大名唱 林芳蔚』 千二斗 現代文学社

『パンソリ 理論と実際』 陳奉圭 修書院

『韓国のパンソリ』 丁ビョンウク 集文堂

『パンソリ唱本集』 金鳳皓 白文社

『パンソリ二百年史』 朴晃 思社研

筆者略歴

一九八九年 本学経済学部卒業生

一九九二年 韓国延世大学法学堂留学

一九九二年 K B S 外国人芸能大会国楽部門最優秀

賞受賞

『書評』は私たちに文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

『雑誌』に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

☎ 388-1121 (内線 4821)

連

載

北朝鮮系・在日教職員団体の教育観

——在日韓国・朝鮮人子女の教育問題ノート 20

梁 永厚

現代社会では、教育というと、すぐに学校と結びつけて考えがちである。それは教育の中核部分を占めているのが学校であるというイメージからきている。その学校には、教育機関としての学校、教育制度としての学校、集団としての学校といった三つの側面があり、教育機関と教育制度を実際に機能させているのは、集団としての学校なのである。

われわれが日常的にいう学校とは、校舎、講堂、体育館、運動場など、教育施設の総体を指し、それを教育機関とも呼んでいる。なお教育制度としての学校は、国家の基本法・憲法および教育基本法の理念を学校教育の制

度や内容に具体化した学校教育法と、その下位の諸規定である学校教育法施行令、同施行規則、学校設置規準、学習指導要領など、といった教育法制にもとづく構成体だといえる。さらに学校として決定づけているのは、教育機関と教育制度に生活力をもたせている教職員ならびに児童・生徒の集団である、つまり学校施設のなかで、教育制度にもとづいて、被教育者の教養の習得、職業と社会的地位の獲得という個人的要求と、技術・文化の向上という社会的要求を実現していくために、教職員集団と被教育者の集団が、不断の努力・格闘をしているところが学校なのである。

さて、一九五〇年代の後半から六〇年代の初期にかけての、在日韓国・朝鮮人の教育機関は、韓国民団系が東京小・中・高併設一校、大阪小・中併設一校、京都中学校一校の計三校であり、中立を標榜していた小・中・高併設校（学校教育法の第一条校）一校のほか、圧倒的多数（小学校六七校、中学校二三校、高等学校一〇校、大学校一校）は朝鮮総連系の学校であった。しかし何れの教育機関も父母や同胞の拠金という自主的な財政によって設立、運営されていたので、日本の公教育機関に比べると施設の劣っていた。その見劣りを克服する内発力に弾みをつけたのは、北朝鮮からの教育援助費の送金であった。この援助費に励まされた朝鮮総連系の各学校は、校舎の新改築、校地の拡張運動に立ちあがった。それに競合して韓国民団、とりわけ民団の大阪本部は本国よりの援助金（一五〇万ドル）をとりつけ、既設の金剛学園を移転拡張する「模範学校設立運動」（途中で民団本部と駐大阪韓国代表部との確執から中断）を進めた。

ついで在日韓国・朝鮮人の子女教育の制度的枠組は、民団系は韓国政府が定めた教育理念を基本とし、中立系は日本の学校教育法にのっとって教育を進めたものの、学習指導要領の国語（日本語）は、外国語扱いで、朝鮮人子女のみを収容しているところから、国語は朝鮮語で



あるなど、實際的に教育法制とは整合性に欠く問題点を孕んでいた。朝鮮総連系は北朝鮮政府が掲げている教育理念に追従する教育内容を探り、それを「民主主義的民族教育」と自称した。

そして在日韓国・朝鮮人子女の教育をしている各学校の学校内団体は、民団系と中立系の学校の教職員は基本的にオープンシヨップであり、児童・生徒は自主的な児童会、生徒会を組織した。しかも朝鮮総連系の学校の教職員は学校長はじめ管理職を含むユニオンシヨップであり、被教育者集団は、当時のソ連においてピオニール(赤色少年団)とコムソモール(青年共産同盟)の下位組織が、学校単位につくられていたのに倣い、全国的に在日朝鮮青年同盟によって、同一方針で画一的に指導される在日朝鮮少年団(小学四年から中学三年までの全員)の学校単位の团组织、高校と朝鮮大学の生徒と学生の集団にたいしては、在日朝鮮青年同盟の学校単位支部をつくること以外は認められていなかった。

標題にあげている朝鮮総連傘下の教職員団体は、一九五〇年代の後半、とくに「資本主義から社会主義への民族移動」と、喧伝された在日朝鮮人の北朝鮮への帰国運動期に、北朝鮮政府の教育政策と、それを在日的にアレンジした朝鮮総連の教育方針を實踐していく翼賛的な職

能団体であることを一層鮮明にするようになった。その翼賛的な教育観と実際のとり組について、今回はみていこうと思う。

そもそも在日朝鮮人の教職員団体は、一九四六年の春に、在日朝鮮人教育者組合として、大阪で産声をあげた。当時は、帰国の斡旋を目的に結成された自治的団体である在日朝鮮人連盟(朝連)の主導により、帰国していく同胞の子女のために、朝鮮語や朝鮮の歴史・地理・文化を教える初等学校(六年制ではなく、大雑把に上・中・初の学年に分けた簡易学校的なもの)が、北海道から鹿児島まで五〇〇校余り創設された。その教育事業は在日



同胞の帰国が終れば、それとともに役割を了えるというものであった。したがって南とか、北とかいう、分断を反映した理念の教育ではなく、全くの民族教育が行なわれたのである。そして大阪で産声をあげた在日朝鮮人教育者組合は、すぐあとに全国的組織となり、在日朝鮮人教育者同盟（教同）と改称された。

ところが同じ時期に、本国の政情不安、経済的混乱といった社会不安のニュースが、在日同胞のなかに伝わり、帰国者の足は鈍り、返って定住を志向しだした。なお本国の動向との連動から、本国政界の左右両勢力の対立が朝連の運動のなかにもちこまれ、朝連の指導部は左翼支持者が占め、右翼支持者は朝連から離れ在日朝鮮人居留民団を結成した。

とくに朝連の左傾化は、GHQ（日本占領下の連合軍司令部）に疎まれ、その指令により日本政府の朝連への抑圧強化をもたらした。そうした情勢の動きのなかでも、教同は民主的な職能組合として機能し、分裂するところまでにはいかなかった。しかし団体等規正令の適用による朝連の解散（二九四九年九月）、朝鮮人学校閉鎖措置（一九四九年一〇月）、朝鮮戦争（一九五〇～一九五三）の勃発といった激動の中で、一部の教員は教同を離れ、中立系の学校または公立学校内に新設された民族学級の教

員へと転進していった。教同に残った教員たちは閉鎖された学校の再建をはかりながら、朝鮮戦争期には「祖国（北朝鮮）防衛」を掲げ、日本の再軍備反対、米軍基地反対などの闘争に、児童・生徒を動員するといった政治的偏向を冒すようになった。そして一九五五年に北朝鮮系の在日朝鮮人団体の運動路線の転換により、在日朝鮮人総連合会（朝鮮総連）が結成されると、それに翼賛して大会を開き、呼称を在日朝鮮人教職員同盟（教職同）と改め、次のような綱領を掲げた。

- 1、われわれは、在日本の全教職員を朝鮮民主主義人民共和国政府の周囲に総結集させ、祖国の南・北半部（注、南・北朝鮮のこと）の教育者をはじめとする全同胞との連携と団結を緊密強固にする。
- 2、われわれは、祖国の主権と領土を侵害し、内政を干渉するアメリカ帝国主義者を首魁とする一切の外來侵略者を撤去させ、その手先である李承晩（注、韓国の初代大統領）逆徒を孤立させ、祖国の平和的統一・独立のために献身する。
- 3、われわれは、共和国（注、北朝鮮）政府の教育政策を奉じ、在日同胞子弟に母国語と文字でもって、民主民族教育を実施し、その基本権益（権利）を保障するために努力する。



4、われわれは、在日同胞のなかに残っている古い思想と封建的な遺習を打破し、文盲を退治し、民族文化の開花発展のために努力する。

5、われわれは、常に愛国主義思想と先進的科学知識と教育実務能力を高め、共和国の教育者としての資質向上に努める。

6、われわれは、教育活動の自由と生活条件の改善、向上のために努力する。

7、われわれは、侵略的原子戦争準備を反対し、世界の強固な平和のために努力する。

8、われわれは、友邦諸国および日本をばじめとする全世界の教育者と国際主義的連携を一層固くする。

この綱領と各年度の活動方針にもとづく諸活動を展開してきた教職同は、一九五九年六月の第十二回定期大会において、婦国運動と連動させて前年度の活動総括と、活動方針を決めた。その総括と方針から、全教員に課している教育観は何かを、以下にサンプリングしていくことにする。

まず総括と活動方針提起のまえおきとして、要旨次のように述べている。

婦国運動の実現が目前という歴史的瞬間に大会を開いている。婦国の実現は、われわれがあらゆる悲しみ

と虐待から完全に解放される途であり、祖国の平和的統一を促進する途であり、一日も早く繁栄する祖国の懐に帰り、祖国の同胞たちとともに幸福な生活を築こうとする切実な念願が現実化するということを意味する。この世紀的な宿望の実現は、ひたすらに金日成元帥を先頭とする朝鮮労働党と、朝鮮人民の確固不動たる主権である朝鮮民主主義人民共和国の存立によって、実現するようになったのである。

なお、この宿望の実現は、在日同胞が朝鮮労働党と共和国政府の施策を忠実に奉じ、朝鮮総連の組織に一枚岩の如く団結し、アメリカ帝国主義と李承晩徒党を反対する闘争を、弛まず展開してきたことによつて戦い取った勝利である。

全盟員は、全民族的課業である帰国運動を自分たちに課された最も重要な任務とし、それを教育事業と結合し、児童・生徒と父兄の思想意識を変革させ、かれらを帰国隊列に結びつける活動で輝かしい成果をあげた。

全盟員は、このように歴史的な運動発展のなかで、自分たちの思想、理論および実務水準を高め、自らの思想を純化し、意志と行動を鋼鉄のように固くし、教育の主体性を確立し、あらゆる創意工夫を發揮し、自

己の活動でより高い矜持感をもって、燃え上がる氣勢で、祖国の革命伝統を發展させる後備隊（後継世代を指す）を教育、教養する事業に邁進しています。

さて、朝鮮総連の帰国運動の対外宣伝方針は、「人道主義にもとづく居住地選択の自由をあくまで主張する」とされていたが、対内的には祖国の建設という名分で労働力として用いようとするものであり、祖国統一という政治目的による韓国への揺さぶりをねらったもので、それを教職同第十二回大会報告のまえおきでは、建設と統



一の闘いに参加するための「思想変革」という表現をしている。なお教育理念即教育観も、祖国の革命伝統を發展させるといふ、民主主義とは縁もゆかりもない国家権力の思想を植えつけることが、第一義であると明言されている。

そして大会報告は、国際情勢、本国（北と南）の情勢などの分析から第十一回大会以降の活動、即ち、①帰国者隊列の拡大、②学校の新增築、③帰国者拡大のための成人教育、④教育の質を高める活動、⑤民主民族教育の体系の拡大強化と教育の教養（注、知育と思想教養）の一元化、⑥教育研究活動を通じた日教組との連携などの活動成果と欠陥について指摘したうえで、活動方針を提起している。

成果のうち眼についたいくつかのあらましは、①帰国実現のために児童・生徒の決起大会を開き、日本政府にたいし無数の陳情書、要請書を送った。教員はこぞって帰国申請をすることを決め、申請を済ませたうえで、父母、児童、生徒の帰国を説得し、帰国者の隊列を広めた。

② i、教育の質を高める活動においては、教育過程での形式主義と経験主義を排し、教育における主体性と科学思想性の確立に努め、祖国の教育理論と実践に学ぶ運動を広げた。

ii、愛国主義教養を強化するために、全学校在在日朝鮮青年同盟（朝青）と在日朝鮮少年団（少年団）を組織し、全児童・生徒・学生に愛国伝統と共和国にたいする意識を高める運動を組織した。なお、その運動と並行して、祖国の書籍、金日成元帥の略伝を研究する活動を進めてきた。

iii、国語教育における教員の指導性を強め、朝青と少年団活動、学級活動のなかで厳しい相互批判をするようにさせ、国語を愛用する運動を指導した。

iv、基本生産技術教育に着手し、労働を愛する精神の培養と、実験、実習、動物飼育などをはじめた。

③ 日教組の第八次教育研究集会（一九五九年二月、於大阪）において、日教組との連携事業を強め、在日朝鮮人の民族教育にたいする、日本人教師の基本態度の確立をはかった。この集会で、日本人教師の仕事は、日本の学校に在学する朝鮮人子女に、民族的自覚と矜持感を培養し、すすんでは、その児童・生徒を朝鮮人学校へ転入学させることが正しい、と確認された等がとくに眼についた。

ここにとりあげた成果は、教職同が朝鮮総連の帰国運動に、学校教育を従属させたことを明らかにしており、教育の質を高めるためのとりくみも、祖国の教育理論と



教師の実践に学ぶ運動の展開を第一にしている。さらに児童や生徒には愛国伝統、金日成の伝記を研究する活動を先行させ、「民族教育」の幹だといえる朝鮮語教育は、思想教育に次いだ位置づけで総括をしている。なお「ソビエト教育学」を鵜呑みにしたといえる基本生産技術教育を財政基盤の弱い学校体制のなかで始めている。これこそは形式主義、教条主義であって、成果といえるものではないと思う（実際には、東京と大阪の高校で、工作機械の実習が少し行なわれたくらいで、主としてラジオの組立て、または木工の実習であった。小学生には兎や鶏の飼育をもって基本生産技術教育としていたが、一九六〇年代のなかばには、とりやめとなった）。

帰国運動への国際的支援の高まりを背景にした、教職同側の組織的エゴイズムの日教組への押しつけ、即ち連携という名分による日教組第八次教研集会での確認は、同集会講師団に属す教育学者の参席のもとになされたが、朝鮮の子どもを受持つ日本人教師の仕事の帰結を、「朝鮮学校へ転入学させることである」としたのは教師の職分を手放す安易な方法であり、時流や教職同の組織エゴに迎合した確認であつたとしかいえない。

そして、第十二回大会以降一年間の活動方針は、①祖国の平和的統一のために、②帰国運動を勝利的にたたかいて取るために、③民主主義民族教育の革新のために、④盟員の物質文化生活の改善のために、⑤同盟組織の強化のために、といった順序でとりあげられている。つまり、北朝鮮政府の政策と朝鮮総連の方針への翼賛である。

③の「民主主義民族教育の革新のために」の、小見出しと、そのなかでとくに眼につく内容（要旨）を紹介することにしよう。

1、民主主義民族教育の正当な権利を守り、教育の量的拡大をはかるために、

(1) 民主主義民族教育の権利を守るために……

i、われわれは、民主主義的民族権利を侵害しようとする、アメリカ帝国主義と李承晩逆徒の如何

なる策動も、それを暴露し粉碎していく。なお日本政府のわれわれの教育にたいする妨害策動の意図を、同胞大衆と日本国民に暴露していく。ii、日本政府に対しては、共和国公民の立場を堅持しながら、帰国実現運動とともに在日朝鮮公民の諸権利を保障するよう要求し、地方自治体からの教育援助費を獲得する運動を継続的に展開する。

(2) 教育の量的拡大のために……

i、学生増加事業を日常的にとりくむ、ii、成人学校、母親学校等を設置する事業の先頭に立つ。
iii、朝鮮学校のない地域に民族学級、午後夜間学校を設置する事業に積極的に参加していく。iv、日教組との連携を強化し、日教組第八次教研集会で決定された、在日朝鮮人教育に関する問題の具体化について、協議を進めていく。

(3) 学生の進路指導について……

i、学生の進路は祖国が求めている忠実な働き手になるようにする。したがって進路指導は生徒・学生の希望にまかせるのではなく、国家的な見地から、本人の能力と素質をよく見て、目的意識的に行なう。ii、進学指導は朝鮮総連の教育体系のなかで、教育をうけるようにする。日本の大学へ

進学させる場合は、朝鮮大学にない特殊な学科に限るよう指導する。iii、就職指導については、祖国に帰りすぐに経済建設に参加できるように技術を身につけるようにする方向で指導をし、将来、在日朝鮮人団体の各機関の幹部候補および教員として、優秀な生徒・学生を推薦する。

2、教員の資質向上と教育の質を高めるために、

(1) 教員の資質向上のために……今日、共和国の北半部（注、韓国も北朝鮮政権の下にあるとみなし、共和国南半部と呼ばれている）においては、教育と生産労働が全面的に結合され、教育事業が新しい質的發展段階に至っている。それゆえ在日のわが教育も、祖国が要求する水準へと高めなければならず、とくに婦国問題と関連させて考えるとき、さし迫った問題として教員の資質を高めることが要求される。したがって盟員は、政治理論知識水準と教育の方法的水準を高めねばならない。なお同盟内における分派的傾向と徹底的に闘い団結を固め、共和国の教育政策を遂行していくための学習と実践に全力を尽くすべきである。

(2) 教育の質を高めるために……

1、児童・生徒にたいし、国語を中心とする基礎



実力を高める。ii、金日成元師を中心とする愛国伝統を継承させる。iii、生産労働と結合させた基本生産技術教育を強化する。以上三点の課業を遂行するためには、まず教員の思想意識水準を高めることは勿論、教員集団の強化と、教員の精力的な努力が要求される。即、日本という腐敗墮落した環境のなかから、児童・生徒を救出し、愛国思想と科学的知識および高尚な道徳的品性の教育と教養をし、さらに帰国問題と関連させて、祖国に帰り共和国の眞の働き手になるといった意志表明

をするよう、教育・教養すべきである。

こうした事業は、教員が一つの科目だけをよく指導して解決される問題ではない。教育事業を愛国事業の一環とみなすならば、教員は児童・生徒をどのような人間に形成させるか、といった階級の立場からの確固たる思想体系を確立させねばならない。

以上、在日朝鮮人教育を担っている教職員団体の方針のサンプリングから、とりまとめていえることは、教職員団体が国家権力の思想にもとづく教育観を徹底的に奉じ、それを教職員ひとりひとりに体得するように求め、その教育観を実際の教育過程において具現するよう方針化されていることであろう。つまり教師集団が、教育と教化を混同し被教育者の個性を画一化することに力を注ぐというのである。そして北朝鮮系の在日朝鮮人教員団体は、一九五〇年代の後半から現在まで、国策の教化にのみ没頭し、いわば倫理性をなくした教化集団という殻に閉じこもっている。むすびとしては、早く殻を破り、開かれた民主主義民族教育へと回帰して欲しいといった思念が切である。

(ヤン ヨンフ・文学部非常勤講師)

第3章 象徴主義運動

Ⅲ 運動の中の詩人たち

6、エミール・ベルハーレン（二八五五—一九二六）と、ベルギーの詩人たち

山村嘉己

エミール・ヴェルハーレン (Emile Verhaeren 1855—1916)

1

ヴェルハーレンを象徴主義詩人の正統に推すことは難しい。もともと、かれはベルギーのエスコール河畔、サンタマンで生まれ、フランドルの風光に包まれて少年期青年期を過している。ポドレールの『哀れなベルギー』をまつまでもなく、フランス人にとってベルギーは辺境なのである。したがって、ヴェルハーレンがよりフランドル的であればあるほど、象徴派の中心になることはありえなかつた。事実、友人の一人ヴィエレ・グリファンが

いうように、（かれが少年期を過した）サンタマンは風車の、籠編職人たちの、紐造りたちの、船頭たちの国である。霧の、霜枯れの、浸水の牧場の国、海綿質の土地で満潮には村々まで潮が満ちて来る国である。われらの詩人は強力で始源的な印象をそこで受け、そしてかれの詩はその印象を固く凝縮して人々に伝えてくれる）のである。

その上、かれが詩作に手をつけた頃、ベルギーの若い文学世代は、《*Vla Jeune Belgique*》を中心に多くの文芸雑誌を発行し、活発に活動を始めていたが、どちらかといえは（血気さかな自然主義派）（マルチノ）的傾向が

つよかった。ヴェルハートレンの『フランドルの女たち』(八三)も《モーパッサンを思わせる非常に写実的なコント、ないし描写であり、陽光に輝く鮮やかな風景、フランドルの田園光景》(全上)であった。そこには祭りがあり、若い男女の騒々しいばかりの饗宴があった。(象徴派のように人生を軽蔑したり、陰鬱にいろどったりするのではなく、むしろ、人生を高揚させ、人生の喧騒に拍車をかける)ことを好む詩人の姿が浮かび出ている。後のホイットマンとのつながりも含め、ヴェルハールンには生涯を一貫してこの人間への熱い愛情が溢れていたが、それでも一方、多様な関心、旺盛な好奇心をもつかれは数多くの作品のなかでいろいろな相貌を示すことになる。一八八七年の『夕べ』はローダンバックに捧げられたとなっているが、一変して《デカダン》としてのかれを浮き上らせる。(『解氷』(八八)『暗い災』(九〇)も同じ) つぎの『風車』はその一例である。

風車は夕闇の奥で ゆっくりゆっくり廻っている。
悲哀と憂愁の空を背景にして。

風車は廻る、廻っている。そして黒い酒かすの色の
その翼ははてしなく哀しく、弱々しく、重苦しく疲
れ切っている。



明け方からその腕は 嘆きをもらす腕のように
高くさしのべては空しく墮ちる。そして かしこに
暗闇の空気のなかで 空しく何度も腕を垂れる。
光途だえた自然の限りない沈黙のなかで。
冬の悩める一日は今枯草の間にひっそり眠る、
雲はその暗い旅路に疲れはてた。
その雲の影を集めて、雑木林をよぎり
車の轍は死の地平線へと果てしなく続く。

《デカダン》というより《深い傷跡》が現われていると、サバチエはいうが、事実、心臓病を病み、失明の怖れもあつた肉体の病いだけでなく、一種の精神的危機がかれを襲つたのは事実であり、それがかえつてかれのなかに内的なヴィジョンを稔らせたと思えることもできよう。

一八九二年の『わが道に現われたもの』ではかれはまだ暗いペシミスティックな像を提供しているが、一方、女性との出会いが明るい回復期をもたらしたことをうかがわせる詩篇が併行して現われて来ている。ヴィエレ・グリファンはいう、《ここで慰安のあけほのが訪れる。

それは亡き一人の女性の思い出であり、また一人の新しく出会つた女性の心慰む存在——それは時には亡き女性ひとの復活にはかならないと思われる存在なのだが——したがってこの詩人の詩の中では、二人の姿が混り合い、この黒から白への変化を確証している。そしてこの内部の変化とともに、一八九二年の芸術家エクトーやヴァンデルヴェルデらと組んだ『人民の家』の設立が、かれにワグナーやユゴー、イプセンの作品に加えて、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) への共感を見出させることになった。この詩人に性質的な身近さを感じたヴェルハーレンはさらに進んで労働社会という新しい世界の魅力を歌うという詩人

の新使命をここに発見したのであつた。『幻覚に墮ちた田園』(九三)、『曆』(九五)、『空しい村々』(九五)、『四方にのびる街』(九五)などが相次いで発表される。

2

これらの詩集にはその新しい主題の発見とともにかれ本来の写実主義的な傾向が立ちもどつて来たことをうかがわせる詩篇が多く見られる。しかし、かれの情熱が立ち向うのは、それらの題名がみごとに暗示するように光溢れるフランドルの原野ではなく、近代文明が大きく手を拡げる都会の姿に向つてであつた。マルチノはいう。

「彼は近代都市をたたえ、工場のある大都會を賞揚することに専心する。過去を喚起してよろこぶとしたら、それは祖先たちの意欲、力、野生がみごとに現われていた時代を再現させるためであつた。反抗、暴動、征服、これがヴェルハーレンの好きな過去である。現在について彼が好んで描くのは、闇をつらぬく世界を帯で取り巻きながら全速力で邁進する列車とか、宵闇に窓をあかあかと輝かし、内部では火事場のごとき騒音を立てている工場、あわただしく絶えずざわついている銀行、出入りの船で混雑し、荷揚人夫たちが辛抱よく立働いている港、世界を征服する黄金、信仰を破

壊し人間宗教を準備する科学、人民を燃え立たせ蜂起させる社会思想、「神聖な力」「飽くことなき闘いとふんだんな情熱」など「拡大された生活」のあらゆる現象、といったものである。」（『高踏派と象徴主義』）

巨大な街路に四角な家々が立ち並び

群衆を取りまき その花崗岩の建物は

窓やポーチでにらみつけかれらを圧倒する。

そのガラス窓には夜明けが夜への別れを告げて光っている。

立ちつくす鉱石と金属のトルソーのように

いかかわしい秘密をたたえ

それでも人々への波打ち喘ぐ心をもって

黄金の記念碑は暗黒のなかにそそり立つ。

その廻りにまっ黒な銀行が重苦しい壁面を並べ

青銅のヘラキュレスは腕をのばしてそれを支え

疲れながら巨大な筋肉をふるって

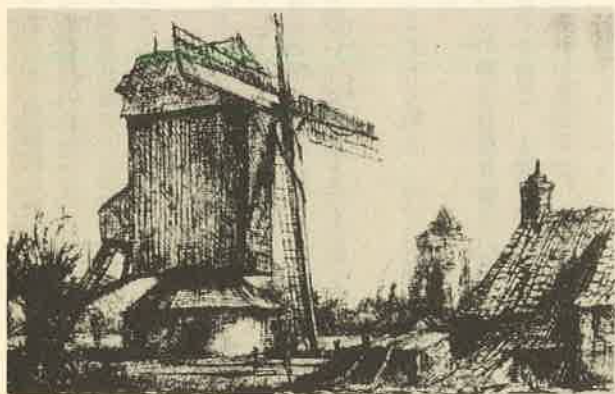
勝利へ金庫を捧げるように見える。

かれが戦いを捲き起す十字路には

隠れた恋人を求めて燃える炎と騒音がにじみ出す。

十字路と街角の広場と壁面とが続き
数知れぬガス燈は歩道の上に
光と影の束を躍らせる。

（『証券取引所』）



フランドル風景（モロー画）

この頃のかれの作品はかなりの長詩なので、これもその冒頭の一部でしかないが、それでもかれの詩心の赴くところは明らかに見取れるであろう。意識の世界で審美のわざを磨く象徴主義とはむしろかなり程遠いところにヴェルハーレンはいるように見える。それはすでに述べた辺境人としてのベルギー人であるという理由のほかに、フランス自身でもそうであったように、反象徴主義的な観念や思想が徐々に各所で顔をのぞかせて来たということでもあろう。かれはそれを自分の資質にあった激情的な方法で示したのであった。

この後『明るい時間』(九六)——のちに『午後の時間』(一九〇六)『夕べの時間』(一九一七)がこれを補足する——『小さな伝説』(一九〇〇)『フランドル全体』(一九〇〇)『原始の優しさ』(〇四)『砂丘の花飾』(〇七)『英雄たち』(〇八)『齒車の街』(〇九)『平原』(一一)とつぎつぎ同じような詩集が編まれるが、正直なところ、どれもが同質の出来とはいえないが、それは(変らぬ熱意をもった心理への配慮で償われており、そこには初期の叙景や色彩の探求のときとは遠く隔った静けさと平衡とが見出される)とサバチエは解説している。そのサバチエが選詩集編者泣かせの詩人と嘆くようにたしかにヴェルハーレンは一筋縄ではまとめることのできない存在

ではあろうが、結論的にはやはりサバチエの定義する(この詩人の直接の目的は自己の表出であり、その結果として美に到達することであった)のは確かである。たとえばつぎの「朝」を見てみよう。

朝だ 野原をこえ果樹園をつらぬき

いつも通る大きな街道伝いに

ほくは晴れやかに軽やかに出発した、

身体いっぱい風と光を浴びながら。

どこに行くのか ほくは知らない。知らないが幸福だ。

ほくの胸はお祭り騒ぎの喜びだ、

権利が何だ 主義が何だ、

埃まれの靴の下で 石ころが鳴り 光を散らす。

ほくは歩く 大気と大地を愛する誇りにみちて

限りなく大きく 心狂おしく

このぎりぎりの生きる陶酔に

世界も何もかも抛り込んで。

ああ 古代の神々の旅する鮮やかな足取りよ!



檜の木立ちが影を落す

ほの暗い叢にぼくは身を投げかける

そして 花の燃える唇に接吻くちくちをする。

小川はやさしく手を拡げてぼくを迎える

いつとき憩うが また出発だ。

偶然という案内役がつきそっている

森の小径をたどりながらぼくは葉っぱを噛みしめる。

今まではただ死ぬために生きてきた

生きるためには生きなかつた そんなに思える

ああ何と多くの墓場を書物は掘ったことか

何と多くの勇士が打ちのめされて降りて行ったか

聞きたいものだ、昨日は物はたしかに存在したのか

また ぼくの眼に先立ってみんなの眼が

果実が美しくみのり ぼらが燃えたつ

その姿を見たのはほんとうなのか。

はじめてのことだ、ぼくが紅い風が

枝の織りなす海のなかできらめくのを見たのは

ぼくの人間らしい魂は年をよらぬ。

太陽の下では すべてが若く すべてが新しい。

ぼくはぼくの眼、ぼくの腕、ぼくの手、ぼくの肉、

ぼくのからだ、

そしてふさふさしたプロンドの髪の毛が好きだ。

ぼくはぼくの胸いっぱい

全宇宙を飲みこみ それで力を溢れさせたい。

森をこえ、野をこえ、溝をこえて歩く歩行よ！

そのなかで ひとそれぞれ歌い、泣き、叫び、

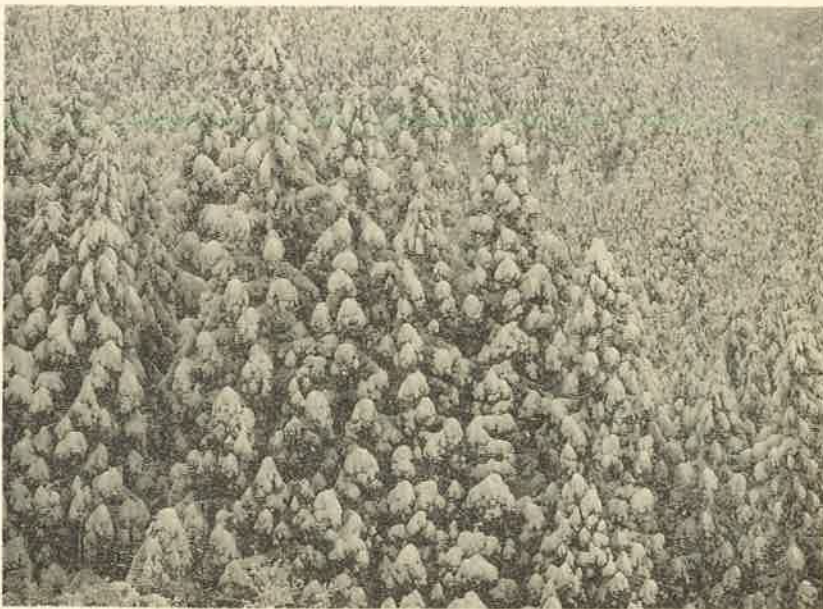
狂おしいまでに力をふりしほり

心を失うまでに自らに酔いしれるのだ。

このように強烈なイメージを、熱っぽい表現でうたい上げる手法は、その主題が象徴派のきらった労働大衆、喧嘩的な光であったということも含めて、ヴェルハレンを象徴主義の歴史のなかの一人に推すことをためらわせるのであるが、恐らくそれゆえに《不実なサンボリスト》の例としてかれを紹介しながらもA・Mシユミット（クセジュ『象徴主義』）はとくに初期のヴェルハレンに象徴主義の多くの影響を認めている。わが国でも『海潮音』を著わした上田敏はかれの「鷺の歌」を

ほのぐらき黄金隠沼、
骨蓬の白くさけるに、
静かなる鷺の羽風は
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、
広がりて、ころもに似たり。
天なるや、鳥の通路、
羽ばたきの音もたえだえ。



と訳し出しながら、「ボードレールにほのめき、ヴェルレーヌに現はれたる詩風はここに至りて、終に象徴詩の新体を成したり」と紹介している。

要するにヴェルハーレンはそのような矛盾した二面を備えながら、結局は自らの資質に十分に忠実に自らの詩業を全うしたというのが正しいのだろう。しばしば引用してきたサバチエは、かれを「激発の詩人」と定義しながら、そのなかに一つは「古典派」的な調和ある造型性と、さらには《中世

に属する》ともいえるより単純な、ゲルマン系の夢想との混淆を指摘するモッケルの説を紹介し「これらの作品には素朴さと純真な微笑みと、驚異に目を見張る視線とがあり、又、かれは自らそれと知らずにわれわれの胸中に通じる言葉が、それはわれわれ



G・ロダンバック（L・ドリユメル画）

のうちに入れられた感情に裏づけられた内的なハーモニーを喚起してくれる」と同調している。

4

ヴェルハーレンの名声に隠れてあまり広く知られてはいないが、ベルギーにはとくにすでに述べた一八八〇年代の《若きベルギー》のようなすぐれた文学者、芸術家の集団があった。かれらは独特の民族性を忘れることなく、しかも積極的にフランスの象徴主義を取り入れ、外郭から象徴主義を豊かにすることに貢献した。さらに先に紹介した批評家モッケルなどが中心になって、マラルメ、ヴェルレーヌはいうに及ばず、アンリ・ド・レニエ、ルネ・ギル、スチュアート・メリル、ギュスターヴ・カイン、ジャン・モレアス、さらにはヴァレリヤジッドに到るまでのフランス詩人との交流を深めたことも特記すべきであろうが、その際ベルギー側の中にはヴェルハーレンのほかにもメルランク、ヴァンレルベルグ、エールスカンプ、セヴェリン、ロダンバックなどすぐれた作家が輩出していたことは忘れてはなるまい。とくにメルランクの演劇活動は象徴派の周辺を彩るものとして無視できないが、それは別の機会に譲るとしてヴェルハーレンにもっとも影響を与えたと思われるロダンバック

(Rodenback 1855-98) について若干述べておこう。

ロダンバックもまたわが国では詩人としてよりも『死の都・ブルージュ』（二八九二）という小説の作家として知られるが、ヴェルハレーンとはガンの大学でともに学び、その深い学識でかれにつよい影響を与えたといわ



れる。しかしバリに出て象徴派の詩人たちと交わるとともに詩作への興味を起こし、『悲哀』（一八七九）、『優雅な海』（八二）などを相ついで発表した。その頃のかれの作風は『死の都・ブルージュ』に見られるような病的で閑塞的な性格を持ち、倦怠と憂愁に満ちたものが多かった。

宵聞せまるひめやかな一時だ

空にはバラ色の行列がいつぱいひろがり

魂やバラを喚び起しては消え去って行く

空中に香炉の香りを豊かにふりまきながら

このときすべては静かに紅の色を失って行く夕日の
澄みわたる輝きの下に息づき

思いに疲れた人々の眼には魅惑が浮かび上る

老いた街角の老いた壁面の魅惑。

.....

（「古い川辺」）

夕暮がたの蕭やかさ、燈火無き室の蕭やかさ。

かはたれ刻は蕭やかに、物静かなる死の如く、

朧々の物影のやおら浸み入り広るに、

まづ天井の薄明、光は消えて日も暮れぬ。



ブルージュ（ベルギー風景）

物静かなる死の如く、微笑^{ほほえみ}作^なるかはたれに、
曇^{わかれ}れる鏡よく見れば、別^{わか}の手振^{てぶり}うれたくも
わが佛は蕭やかに泣^なり失^うせなむ氣色^{きしほ}にて、
影薄^{かげうす}れゆき、色蒼^{いろあお}み、絶^たえなむとして消^けつべきか。

……………
〔黄昏^{たなごれ}〕 上田敏訳

（ここ）に『海潮音』から敏訳の一部を借りたのは、すでに紹介したヴェルハールの詩と雰囲気がよく似ており、それが象徴派としての二人の類似性を示していると思われたからである。

マラルメは、ロダンバック氏はわたしの知り限りの芸術家のなかで、もっとも絶対的にかつもっとも繊細のひとつの一人である。かれの芸術は繊細にして同時に的確なものだ。わたしはそれをフランドルのレース編みや金銀細工に対比したい。」と讚えたというが、サバチエもフランドルの地方性を十分に内部に秘めながら、ロダンバックは「真正のしかし人生との接触もけつして絶えない象徴主義から始めている」と評価している。

（やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員）

連

載

おいてけぼり

宮本輝試論 IX

芝田啓治

十一、「おいてけぼり」そして旅

(3) 宮本輝の場合

宮本輝という作家は、そのスタートに於いても、又自らの基盤という点に於いても川というものを大切にしている。それは何故なのか、そしてそれを探る事が、又その延長上に彼にとっての旅が見えて来るのではないだろうか。

「川が地球という生き物の血管であることを、朦朧とした精神のどこかで妙にはっきりと感じた。」(宮本輝「ドナウの旅人」)とあるように、地球が生き物ならその生

命線は川であり、淀みなく滔滔と流れる川があつてこそ地球が生きる所以であり、自然が守られると考へているのである。そして、川は地球的規模と大上段に振りかぶらなくとも、常に我々の生活に密着しており、その流れは様々な事を教えてもくれるのである。そして、宮本の旅は常に川の流れと共にあり、河畔で育ち成長していったのであり、それは彼の初期の代表作である「川三部作」に読みとる事が出来る。

『泥の河』は、大阪の堂島川と土佐堀川がひとつになり、安治川と名称を変えていく地点を舞台にとつた。昭和三十年の話である。深く幅広く、いつも黄土色で、曳



航するボンボン船のかたわらを鯉や鮒が横切っていくの
んびりした川であったが、身元不明の溺死体や、まだへ
その緒のついた赤児の死体などが、ゆらゆらと流れてく
ることも珍しくなかった。……そこには確かに、歎びや
哀しみや、生や死や、その他人生のあらゆることがら
一斉に流れ込んで来た最初の場所なのである。」(同「川」)
宮本家は、この河畔で生活をしてきたが、昭和三十一年
宮本九歳の時、この住み慣れた地を離れなければなら
なくなるのである。宮本が自らの作家としてのスタート
の地をこの場所に設定したのは、正に彼の人生に於いて、
又彼の旅に於いてスタートを切った場所であるからだ。
もちろん小学生の彼が自らの意志で旅のスタートを切っ
た訳ではなく、彼の父親によって否応無く切らされたの
であった。宮本同様、母親も又旅のスタートと言うより、
大人にとっては放浪のスタートを切る事になるのであっ
た。

「『ああ、もうこんなに雪の降るとこはいやや。お母ち
ゃん、大阪に帰りたいわ』そう涙声で呟いて、あけはな
った窓のところに座り込むと、母は雪で頭や肩や胸を白
く染めながらうなだれていた。」(同「雪とれんげ畑」)

父親の事業が上手くいかず、挽回策のため大阪から富
山へ移って行くのであるが、少年宮本にとっても心細い

旅の始まりであったに違いない。大阪の「泥の河」を離れ、富山の「螢川」への転居は、次の言葉によく表われているのではないだろうか。

「富山の雪——そう書き出すだけで、私の心はまるで機械じかけのように、冷たく暗い風景を浮かべてしまふ。」(同「わが心の雪」)

不本意ながらの富山への移転は、少年宮本にとっても言葉の違い、習慣の違い、更には気温の変化や雪の多さなどといった違いだけでなく、はつきりと置かれた状況の変化を感じとったのであろう。何不自由なく育って来た環境が今にも崩れそうになっている事を直感したのである。

「私たち一家はその後、富山市に引越して行った。雪深い街のかたすみを、縫うように流れているいち川のとりに住居を定めて丸一年間暮らした。……楽しみにしていた螢狩りは、父の商売の失敗によって実現しなかった。吹雪の日、私たちは何もかも失って、再び大阪に帰って行ったのである。」(同「川」)

遂に、放浪の旅は現実のものとなり、一層苦しい情況へと追いやられたのである。

「大阪へ帰ってから、私たちの生活はいっそう苦しくなっていた。父は何をやっても失敗し、歳を取り、い

つしかよその女のもとに入りびたりになり、家にはほとんど寄りつかなくなってしまった。」(同「雪とれんげ畑」)

父の放蕩はその後も続くのであるが、宮本は宮本でそんな父から徐々に意識的に離れていくのであった。これも、青年期の入口で誰しも経験する旅立ちなのかも知れない。



「高校生のとき、私と母を捨てて、よその女のもとに走った父に対する憎しみを、私は父から買ってもらった幾つかの品物をすべてトブ川に放り投げることで晴そうとした。万年筆、釣竿、顕微鏡……。」(同『風の王』に魅せられて)

宮本は決して父の姿を正面から見ようとせず、疎ましい父、腹立たしい父、恨めしい父の後ろ姿を垣間見るのである。又、宮本は山頭火同様の体験をするのである。

「母は私が高校生のとき、自殺をはかったことがあったのだが、その際の状況を、いかにも適切な言葉が浮ばなくてもどかしいというふうには早口で喋った。『お父ちゃんはやそに女をつくっておらへんようになってしまし、商売はあかんようになるし、毎日毎日借金取りは来るし、ええい、もう死んでしまおうたれと思てん』(同『眉墨』)

山頭火の場合は、目の前の水死体となった母を凝視したのに対し、宮本の母の場合は発見が早く幸いにも未遂に終わったのであった。その時、宮本は父の背に灰皿を投げつけ意志表示をするのだが、山頭火の場合は父を恨むも怒りや憎しみを表面に出す事なく、じっと内面で受け止めざるを得なかったのである。それは、青年の入口に達していた宮本と少年期の山頭火との違いであろうし、

又何よりも未遂と自殺との決定的な違いによるものであろう。

「そして南の盛り場に生きる無類の人間たちの黯い生温かい熱情に包まれて、私はおとなになっていったのだ。死人の目のような道頓堀川の水面に己れの虚像を映しながら、私は青春の一時期を酒と煙草と賭け事で過ごしてしまった。」(同『川』)

宮本は「泥の河」で旅・放浪のスタートを切り、「螢川」で富山に住む心細さ、放浪の辛さを感じ、そして父の事業の失敗により再び大阪に戻り「道頓堀川」附近で育つのである。心の放浪も含め十年余の旅なのであった。この間、父の事業の破産、度重なる転居、離散、居候、父の浮気、母の自殺未遂、父の死、借金苦、神経衰弱と気の休まる時がなかったのである。この体験は山頭火の父の浮気、母の自殺、大学中退、一家離散、弟の自殺、神経衰弱、自殺未遂、泥酔、カルモチン、家庭の崩壊と根は同じであり、共通項も多々見受けられる。しかし、それらの体験の後に山頭火の場合は孤独な旅が続くのであり、それが彼の人生そのものとなり、旅なしに彼の人生は語れなくなるのである。一方宮本の旅は、父と共に、いや父の後ろ姿と共に続いていたのであるが、山頭火の「うしろ姿のしぐれてゆくか」の句に、宮本は父を見て

いたのではないだろうか。この句は、山頭火にとっては自分自身の後ろ姿だが、宮本にとっては父親の後ろ姿であったに違いない。父の人生からすれば、事業の失敗の連続の中で、跪けば跪く程泥沼に陥つたのである。「どうしやうもないわたしが歩いてゐる」(山頭火)と父親自身感じていたのであり、その意味で山頭火の中に、又山頭火の句の中に父の姿が見え隠れしているのではないだろうか。

“旅しか出来ない人”それが山頭火であつたが、宮本の父親もそうであつた。何故なら、その父の死と共に、宮本の旅も終るのである。もちろん後遺症を引摺りながらも。父のように旅を続けられない、否続けたくないといった拒否が知らず知らずのうちに宮本の心に広がっていくのである。

「私も母も、父の死を悲しむ心すら失つて、葬式の費用のこと、残された借金のこと、あしたからの生活のことなど、じつと考え込んでいた。」(同「五十肩」)

様々な家庭の不幸が、家族に襲いかかる困難が山頭火の家庭での根を断ち切つたのである。そして、その後一度として根付かなかつたのであるが、宮本の場合はその根をどうにか根付かせようと努力し、苦闘の末、遂に根付かせてしまうのである。それは、父との和解。父への

労りが自然と生まれ、父との傷を癒し、健康体になつた証しなのではあるまいか。

「何をやつても失敗ばかりして、悔しかったやろなア」(同「雪とれんげ畑」)

「私を溺愛してくれた父の、その激しい愛情に対して、私は何も報いることはなかつた。幾つかの心に残る光景も含めて、私は父から多くのものを学んだ。」(同「越前海岸」)

しかし、宮本にも後遺症とも産みの苦しみとも言える苦闘が続いた、頭で父との和解がはかれたとしても、不



安はつきまとうのである。それは山頭火自身も同様悩んだ。「肉縁は切っても切れないが、友情は水のやうに融けあふ、私は血よりも水を好いてゐる」という点である。結局、自分も父と同じ血が流れているという自覚と悔恨に悩まされ続けるのである。否定しても否定しても、否定しきれぬ血。憎んでも憎んでも、憎みきれない性格、性癖。宮本は自分自身も狂うのではないか、そして更に追いつめられ死ぬのではないかといった苦悩に襲われ、自らの位置を見失う一時期もあるのである。放浪や旅を憎んだがゆえに、一人では歩けなくなり、大きな反動を背負い込んでしまふのであつた。

「二十五歳のとき、突然奇妙な病氣にかかつた。電車の中で、強い眩暈と動悸と不安感に襲われたのである」(同「命の力」)

それ以来宮本はこの病いにとりつかれ、結局一人で電車すら乗れない状態になり、サラリーマンを止めざるを得なくなつた。しかし、一方では小説家を目指し再スタートを切る事になつたのである。

旅を否定し、否定し尽くし、放浪を嫌い、嫌い抜いた時、彼は家庭にそして家族の中に根を張ることが可能になつたのである。決して生易しい選択ではなかつたろうが。父が成し得なかつた根をきちんと根付かせ、張りめ

ぐらせたのである。そして、完全に旅に終止符を打つたのであつた。

宮本の人生に於ける旅は、「泥の河」に始まり、「道頓堀川」に終つたと言えよう。その後も彼の作品の中に川が扱われているが、決して旅で出会う川ではなく、旅行中の川なのである。後者の代表が「ドナウの旅人」であり、「異国の窓から」という事にならう。「異国」と感じる事は、即ち生活の一部ではないし、又「異国」と感じる視点はすでに旅人のものでなく旅行者のそれである。川が人間の一部として、又生活の一部として流れているのではなく、景色の一部になつて横たわつてしまふのである。「泥の河」「螢川」「道頓堀川」の川の流れと「ドナウの旅人」で流れる川とは全く異質といえよう。

しかし、旅を経験した宮本にとつては、心の中にいつまでも旅が生きているのかも知れない。取材旅行に出掛け、ふと旅情に浸る時必ず出てくるのが、父と共有した風景であり、又父の姿なのである。

「私は夢を見ていたのだ……その殆どは父の夢であつた。不思議に死んだ父の夢ばかり見ていた。私の父は精神病院で死んだのだが、その父の、大部屋の汚ないベッドで昏睡状態のまま死を待つていた姿は、旅行中、何度私を夜中に目醒めさせたかしのれない。そして、夢を見な

がら泣いていたのに気づき、茫然としたことがしばしばあった。」(同「異国の窓から」)

父の旅人としての姿がやはり宮本の心の中から消え去らないのであろう。

「晩年、落ちぶれ果てた父の姿を見るのがいやで、私は家に帰らなかった。父が倒れ、入院しても、私は上手



な口実を作って、父から逃げ回っていたのである。」(同)やはり、山頭火の句「うしろ姿のしぐれてゆくか」に宮本は父の姿を見ていたのである。

「眼下にドナウ河が流れていた。……私は回廊の巨大な柱に凭れて、夢のような風景に見入った。夢のような……。それ以外、いかなる言葉も思いつかなかった。私は西行の歌を思い出し、そっと何度も呟いた。

願はくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月のころ」(同)

旅情は、父を思い出させ、そして西行の歌を思い描かせるのであるが、西行の生き方は旅に生き、自然を友とする生き方であった。身軽になって旅を生き、そしてその死は自然に帰るのである。西行は願い通りその人生を歩み死を迎えていったのに対し、宮本の父の旅は失敗の連続で「悔しかったやろなァ」となるのである。精神病院の汚ないベッドの上で世間から見離され、家族の手が届かない中で死を迎えるのであった。そして、その臨終の姿は宮本に様々なものを与えたのである。きつと宮本の父も、放浪の果てに精神病院のベッドの上ではなく、桜の花の下で死を迎えたかったであろうし、宮本も又そのような事を父にさせたかったのではないだろうか。それゆえ、宮本は旅に終止符を打ち、生活に、家族に、家

庭に根をはったのであろう。しかし、父と共に、父の後ろ姿と共に歩んだ旅は心の中で生き、作家宮本の一部となつていたのである。

関西大学のOBで、卒業後新聞の編集に従事され、定年後中国の名句を訳すという仕事をされていた小幡喬氏の記事を新聞で読んだ。小幡氏は、大腸癌を平成四年に宣告され、余命一年と診断されたそうである。そこで、積年の想いをこめて歌集「桃源」を発表された。サブタイトルが「人生の旅の終りに」とあり、如何に人生を生き抜かれたか、又死を目の前に見据えての心境をあつく、時には淡々と語られているのである。

「食欲のなければ今朝は白粥に

でんぶ振りかけ十字架描く」

「西行も芭蕉も知らぬ旅おもふ

心の奥の桃源の郷」

人は長い人生を歩んで来た時、自ら歩んで来た遠き道程、困難な道程を思い描くものなのかも知れない。しかし、これから先の苦痛や苦悩や不安を抱きつつ、直も心の桃源郷を追い求めるのであろうか。

「この旅、果てない旅のつくづくほふし」(山頭火)

「そこに月を死のまへにおく」(同)

旅を生き、旅に死す。如何に孤独であることが。そし

て自然に戻る。この生き方を求めて生きた人も多い事であらう。西行しかり、芭蕉しかり、そして山頭火。

旅は人に様々な人生を、生き方を、そして死に方を教えるものである。しかし、旅に生きる事がたとえ出来なくとも、又その生き方を否定しようとも、人は旅から、又旅を生きた人から多くのものを学ぶ事が出来る。宮本もその一人なのであり、旅情を抱え、旅情に浸り、そして旅情を描き続けるのである。それは、父の後ろ姿と共に。

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

連

載

日本中国ことばの来往ゆきまき

その50

芝田 稔

ブームと新語・「下海」

「ブームと新語」について考えてみることにしたい。ブームといえは、にわか景気・にわか作りの活気が社会に反映した現象であるから、本来長期にわたるものではない。したがってブームという社会現象から生れた「新語」にはそれほど寿命の長いものはないのであるが、偶たまには例外もある。

そういえば、中国に新しい政権が生れてから今年は四五年目に当る。この間に幾つかのブームが大陸の青年を沸わかきたたせたものである。いや、今も沸わかき立たせている

のがある。昭和二桁の初めから中国語と付き合つて来た筆者にとつて、この「ブームと新語」との関係については、特に印象深い体験や感想があつて、忘却するに忍しのびない懐かしさがある。いずれ少し時間を掛けて「鬼が笑わらう」かも知れないが、戦後五〇年の節目となる「来年」に備えてはどうかと考えているのである。

過去まきのことは扱さ置き、現にブームを起しているブームの中の寵児である「下海シヤカイ」を取り上げてみよう。これは八〇年代初期の「改革開放」政策から生れた新語には違ちがひないのであるが、この政策が経済建設を推進・発展



させる原動力となっているのと同様、この新語は今や流行語となつて、経済建設促進の一翼を担^{にな}っている、といつても過言ではない。官吏は勿論、大学の教員からスポーツ選手、芸能人、労働関係なら工場長・技師・熟練工・その他軍人であれ、体力・気力・資力を駆使できる者でありさえすれば、老若男女を問わず、誰でも「下海」でさるのである。もつとも、甘い夢を追つて海に溺れ、元の職場へ戻つて来る者も少くないといわれているのだが、「下海」ということばは、古くからあつて漢字が示しているように、①海原に出ること、②漁夫が漁^{りよう}に出ること

とを指すが、③素人芝居の役者がプロの役者になることをも意味していた。ところが八〇年代に入り所謂「自由市場」が定着し、流通の活性化、経済発展という実績が、一地点を中心に次第に広範囲へと拡大して行くにつれて「下海」という新語が生れたのである。

この事情について筆者が初めて実地に見聞したのは、八五年五月瀋陽市においてであつた。その頃の「自由市場」といえば日本の大都市で見受ける「歩行者広場」よろしく、二百米程もある町並の一郭を区切り、両側の商店と道路中央に所狭しと居並ぶ農産物の屋台店がその全容であつた。両側に軒を連ねる商店には各種一品料理の食堂や日用雑貨品、家庭道具から服飾やミシン縫製、さらに電気器具修理等普通の商店街とほとんど変りはない。ただ奇妙に思つたのは、この商店街には旅行案内所と簡易宿泊所が新設されていることであつた。その説明を聞くと、当初この「自由市場」への供給者は主として瀋陽近郊の農民や市内の軽工業労働者に限られていたのであるが、筆者が現場を訪れた頃には、遠く上海方面からスッポン等の特産物を売りに来る業者が現れ、物流の種類や範囲が拡大する一方であつた。となると、その人達に対するサービス施設や機関が必要になつて来たのも当然であつたのである。



もつとも、その頃の「市場経済」活動といえ、戦後の日本にもあったあの「かつぎ屋」程度に過ぎなかつたかも知れない。それでも彼らの実収入は、一月単位で見積もると大学教授月収の何倍かに当る程、稼いでいたのである。中国の大都市の近郊農村や幹線鉄道の主要駅近在の農民の間に「万元戸」が誕生したのもこの頃であつた。こうした風潮と景気を肯定し、さらに一層拍車を掛けたのが、鄧小平の所謂「猫論義」である。

ずばりいって「下海」とは「商売をして儲ける」ことを意味するようになったのである。どんな色のネコでもかまわない、ネズミを多く捕るネコが善いネコだ、という意味でもある。「下海」にはどこかに自由の匂がする。これまでの役人生活といえ、机に向つて新聞を広げ、熱いお茶を大事に啜り、三人寄れば世間話」というのが通り相場であつた。ところが「市場経済」が軌道に乗り、あちこちに万元戸が生れて来ると、いつまでも事勿れ主義を守っているわけにはいかない。加えて「改革開放」政策について、九二年春に広州と深圳経済特別区を視察した鄧小平が全党、全国、全世界に向けて、再三にわたる「路線に変更はない。変更できないし、また変更してはならない」と述べたし、さらに「百年は続ける。百年は変更してはならない」と言明したのである。

以来「下海」は一種のブームとなり、大学から始まって各種行政機関の高官、党の古参幹部、労働模範さらに科学者・藝術家・スポーツ選手、また集団を組織した農民に至るまで賑々しい状況を見せている。十年前には「万元戸」が出たと騒がれたが、今日では彼らはもう金持ちには入らない。「十万元戸」では駆け出しであり、「数十万元戸」なら「まあまあ」といったところ。「百万元戸」の大台に上って金持ちの仲間入りができるのである。何しろ「千万元戸」が目下五百人を数えるというし、皇帝の呼称を持つ「億万元戸」も数人は居るらしいのである。このような経済的な盛況に対して「百年間」の保証を与えてもらっている現在では、益々あの手この手の「金儲け」が案出されていくのも無理はない。この点控え目で大人しい「大学人」でさえ、外貨稼ぎには仲々の腕前を發揮しているのである。

筆者が戦後初めて北京を訪れたのは六六年五月であり、それはちょうど二〇年振りの北京訪問であった。その時、北京では唯一つ（中国全国で唯一箇所）、北京語言学院だけが、外国の留学生を受け入れて専門に中国語を教えていたのである。大学で正規の教育活動を通じて外貨獲得できたのはこの学校が最初であり、唯一の存在であつ

た。しかし校舎は古くて狭く、留学生も殆どが社会主義国からであり、人数も数百止りであつたと記憶している。ところが八〇年代に入つて「改革開放」政策に続く「市場経済」の推進によつて、留学生の受け入れ態勢がガラリと変わり、北京語言学院は新設校舎へ移転し、大々的に、自由に何処からでも留学生を受け入れることになった。そして九二年から「北京語言文化大学」と名称を改め、長期・短期の留学制度は勿論、文学・歴史・藝術等の講座を設け、留学生には快適に生活できるよう大いに心を配っている。というのも、留学生に中国語を教える専門の学校とはいえ、競争相手が無数に増えて止まるところが無い状態となつてきたからである。いまや北京では勿論、全国の大学と名の付く学校は殆ど外国人留学生の受け入れ歓迎に踏み切っているからである。

こうして留学生が増加するにつれて、教員の収入も増加してある程度の目的が達成できたのであるが、逆に教員は授業に追われて研究時間が削られるという負の面も見逃せない。そればかりではない。学内に「二つ星」程度の宿泊ビルを建設し、外国人の訪問客や研修員家族に開放したり、また市民の結婚祝宴等を請負っている大学もあり、ここでは外国勤務の経験豊かな一級料理長を据え、この面でも名声を高めているのである。大小を問わ



ず儲ける方法を考案し実行力に物をいわせて稼ぎまくる人物は、一律に「善い猫」であると信じて疑われない雰囲気だ、中国には醸成されつつあるように見受けられる。昨年北京で多少面識のある人から「土地ころがし」にも似た商行為の妙味を聞かされて、ガツカリもし、驚きもした。

中国は歴史の古い国柄である。外国人の目を引くのは骨董品である。特に日本人にとって中国の骨董品には重味があるような感じをもつ。しかも七〇年代までは全ての商品は定価通りで売買されていたので、端溪たんげいの硯すずりを買うにも値段だけで評価ができたのである。質の上下があつても端溪には違いない、という安心と信用があつたからだ。今は違う。値段は買い手によって千差万別となる。所謂「お上りさん」には身内意識が作用してか余りふっかけない。せいぜい原価の五、六倍といったところだそう。それが外国のツアー客となると物凄ものすごい。

これには外国語のできる女性（「打工妹ダウジメ」という特別呼称がある）が客引き役となる。容姿端麗ならなお結構であり、流暢な日本語でツアー客を骨董品売場へ誘い込み、客と売手の通訳まで買って出る。そこには八千元（一元十三円として十万四千円）の正札をつけた絹張りの掛軸があるという。大抵の場合、この商談は半額の四千

元まで値引きした頃に、客が納得して成立するのである。現金取引が終り客が立ち去ると、番頭は客引と通訳をしてくれた娘を片隅に呼んで二百元(約二千六百元)を握らせる(これは普通労働女性の賃金の一ヵ月分に近い)。それもその筈、その書面の仕入れ値段は大体百元(千三百円)程度のもだからである。——こんなボロい商売が「下海」の波間に見え隠れしているのが現状である。

「市場経済」という原則の下では、人間も商品化されるし、商品化した人間になっていく傾向が見られる。深圳といえば中国経済特別区として最初に近代都市として建設された都市であるが、ここで働く青年たちの気質もすっかり近代的に様変わりしているようである。彼らには「今」が大切であつて、過去には無関心である。ということは、深圳では色々な人が会社や商店を営んでいるが、その人がどんな人であるかを見るのではなく、その会社や店を見るのであつて、深圳人にとってプラスになるかならないかによって評価が変る。社長や商店主がどれほど有名な人物であろうと全く関係がない。会社や商店の業績が悪ければ冷酷な扱いをうけること必至であり、曾てのようにギルド的な相互関係は微塵も見られない、非情そのものである。

そのためか儲けるのもすごいが身を崩す若者も多い。その筆頭は「夜の歓楽街」である。ダンス・カラOK・ディスコ・音楽喫茶・カフェー・その他、これらが青年たちに「太く短かく」歓楽を追求させているのだ。一昨年の統計によると北京ではダンスホール兼カラオケ業者が一三〇軒、上海では一五〇軒を数え、音楽喫茶は何れも五〇〇軒を越え、毎晩のように十萬の青年男女が歌い踊り狂っているのである。

このように経済発展の裏でボロ儲けと歓楽に酔っている大都会と教育施設さえ意のままにならぬ内陸奥地の農村とは、その経済的偏差は年々に増大し、その結果農民人口の大移動を余儀無くさせている。この五月に公安当局が公式に発表した移動人口——農山村から大都市や経済特別区へ出稼ぎに出た流動人口——は、八千萬人に達している。この数字だけから見ても「下海」が如何に中国全体を呑み込みつつあるか、またその影響が如何に深刻且つ強大であるかを物語っているのである。しかもそれは国内問題に止まらず、その余波は外国にも影響を与えている。この四、五月にかけて頻繁に西日本海岸へ上陸を試みた密入国船の出現も「下海」とは無縁であるう筈がないからである。

(しばたみのる・元文学部教員)



編 集 後 記

『書評』一〇五号をお届け致します。今号は、一〇四号から半年ぶりの発行となりました。『書評』編集委員会内の不手際により内容も寄稿一編と連載のみとなってしまいました。

執筆して下さった先生方、並びに読者の皆様には御迷惑をおかけ致しましたこと、深くお詫び申し上げます。

次号以降は、「特集」なども企画し、新たな切り口で『書評』を作っていきたいと考えております。

なお、『書評』編集委員会では、本を介しての批評や感想を述べた投稿、短評などの持ち込みや、編集委員会での編集活動など、『書評』への参加をお待ちしています。これからも宜しくお願い申し上げます。

季刊 「書評」 1994年10月 通巻105号

編集・発行 関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1(☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)
頒 価 250円